

## アンコール遺跡保存研修旅行

東京都建築士事務所協会港支部がシュムリアップを中心に  
アンコール遺跡群の研修を行いました。

日時：平成 28 年 2 月 10 日(水)～2 月 14 日 5 日間

参加：(株)エヌイーオー空間計画研究室 (株)緒方建築  
事務所 笠井設計(株) (株)ジャパン・ドラフティ  
ング (株)セド一建築事務所 (株)総合建築企  
画研究所 タキロン(株)一級建築士事務所 (株)  
ツカモト (株)ティオーエス計画工房 (株)中山克己建  
築設計事務所 (有)乗富久哉建築設計事務所  
(株)ユニバァサル設計



12 事務所 17 名の参加でした。

港支部では、第 1 回 1992 年、第 2 回 2000 年そして今回 2016 年のカンボジア訪問  
は 3 度目のアンコール遺跡研修となりました。

港支部では、カンボジアの遺跡保存と現地指導を行っている上智大学に賛同し、  
毎年協賛金を寄付していますが、自らもアジアの石造建築物を自らの目で確認し  
ようという趣旨から今回のツアーを行いました。

第 1 回目のツアーの時は、首都プノンペンから手荷物だけを持って小型の飛行  
機でシュムリアップに降り立ちましたが、空港のイミグレーションは郵便局のカ  
ウンターという雰囲気でした。観光目的の入国は我々だけで、街には UNTAC のジ  
ープが走り回っていて、観光とはおよそかけ離れた雰囲気でした。

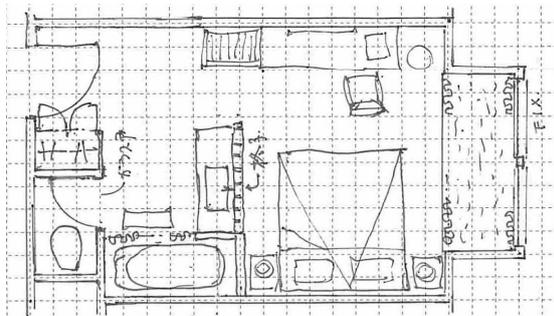
今回ツアーに背中を押された理由の一つに、年々観光客が増え肝心の遺跡が痛  
み、遺跡保存と事故防止の為に立ち入り禁止箇所の増加などで、ゆっくり遺跡を  
見学することが難しく成りつつあることを憂慮してこの日に決まりました。

旅行社は上智大学の石澤先生から紹介されたユーラシア旅行社、添乗員はベテ  
ランの齋藤晃子さん現地旅行社は第 2 回目の時に世話になった JHC アンコールツ  
アーです。

2月10日(水)

成田空港第1ターミナル北ウィングGゲート前集合、各自スーツケースを預けてVN311便、午前10時00分でハノイに向け出発。飛行時間5時間半でハノイ午後1時50分、トランジットの後VN841便にてシュムリアップへ午後6時20分着、日本との時差+2時間。空港よりバスで、新しく綺麗なホテル SARAI RESORT & SPA へ午後7時30分着、本日は移動で一日が終わりました。

ホテルの部屋は、全室がプールのある中庭に面して配置され、約21㎡、中庭側の窓ははめ殺し窓、窓に接して小型のベットくらいのソファ、独立したバスルームでは無く、浴槽にはハンドシャワーと固定シャワー、浴槽に給湯する水栓なし、湯をためて体を伸ばす習慣は無いようです。



セフティーボックスには貴重品は入れないように、添乗員の齋藤さんから強く指示された事と暗証番号のボタン脇のプラスチックが外れていたこともあって私はボックスを使用しませんでした。

2月11日(木)

午前7時30分ホテルを出発、現地ガイドは若い美人のピーナさん、バスドライバー、チネッタさん、昨夜の空港から帰国時の空港まで世話になりました。

シュムリアップからアンコールワットへまっすぐ進む道路のほぼ中間にあるチケット売り場で、まず有効3日のアンコール遺跡群に入る顔写真付きチケットUS40\$を手に入れた後、チャーターしてある大型バスはアンコールワットの堀の前まで行き、ここからは小型のバス(その都度行く先と金額の交渉をして)に乗り換えて、それぞれの遺跡に向かいます。

**タ・プロム寺院**、まず空いているうちにと、言うことでアンコールワットを横に見ながら寺院の見学に向かいました。

この寺院は12世紀末にジャヤバルマン7世によって仏教寺院として建立され、後にヒンズー寺院に改修されたと考えられている様です。



ガジュマルの木の根によって遺跡そのものが包みこまれて異様な雰囲気を出しています。自然のままの状態での保存を目指していましたが昨今になってガジュマルの木の老朽化に伴い倒木の恐れ、それに伴って遺跡までも壊してしまうことから、危険な部分は切り取っていく方向になったと聴きます。これも今のうちに見ておかないとのひとつでしょう。

アンコールトム（王都、およそ3km四方）には東側の勝利の門からに入りました。象のテラスを横に見ながら少し北へ進み、水の女神達のレリーフの歓迎を受けながら回廊を進みます。さらに象のテラスに上がりライ王レリーフ（本物はプノンペンの博物館ここのはレプリカ）に対面、お線香を上げてカンボジアの発展を祈りました。



ライ王とは当時大いに活躍した王であったが癩病に掛かり病に倒れた王、ジャヤバルマン7世のこと、民衆に優しく病院建設などにも積極的であったと、理解していましたが、ガイドのピーナさんの説明ではライ王とジャヤバルマン7世は別人とのこと、一説ではライ王とは地獄の閻魔大王との説もあるようです。

このテラスの上を南へ少し歩いて、ピミアナカス（10世紀末にスールヤバルマン1世が建立）の前を通り抜け修復の進んだパプオン（隠し子寺）へ、ぐるりと回り込んで正面に出ます。さて上まで登りますか？ 疲れもピークに近い状態でしたが全員登頂に挑みました。急な階段を上り詰めると上から見る景色は周囲の森の緑と青い空が広がり、溜まっていた疲れもすっかり癒やされました。なぜ「隠し子寺」かは別の機会に。

次にいよいよバイヨン寺院です。ジャヤバルマン7世が帰依していた観世音菩薩の顔五十あまりを、それぞれの塔の四面に配置されているのが特徴で、建築的にはアンコールワットとやや異なった建



築様式が感じられます。

回廊に彫られたレリーフは隣国との戦いの様子、農村の様子、水軍の戦い、動物や、植物などレリーフが精密に彫り込まれていて興味深く見る事ができました。

シュムリアップ市街に戻り、フランス時代に作られたラッフルズホテルの近くのレストラン FCC（レストランの名前）へ。食事は串焼き、フルーツ、焼き肉とご飯とビール。



昼食の後はアンコールトムの南大門へ、先にアンコールトムの内部を見学してしまったので堀にかかる橋の両側に配された七つ頭のナーガ、その胴体を抱え綱引きをする神々と阿修羅の54体の巨像、さらに南大門の上部に構える仏面と象の彫刻を見学しました。、続いてアン

コールワットに向かいます、相変わらず観光客の多いのには驚かされます。

堀の手前でチケットチェックを受けて長い参道を渡って、向かって右の入り口、象の門より西参道へ、左右に経堂を見、蓮の花の咲く池を見ながら、アンコールワットの大塔門を通過して十字回廊、ここから第三回廊に登ります。

ここは人数制限が設けられていて一定の人数がチケットを持って登り、降りてくるとそのチケットを変換して次の方に渡す、結局チケットの数以上は入れない仕組みとなっています。45度を超える石段に変わり、勾配を緩くした木階段が設けられていて第三回廊に登れるように成っています。さすがにここからの景色は素晴らしく、凜とした空気と静かに広がっている平野が心の中に染みこんできます。



第三回廊を一週してまた急な下り階段を下り、十字回廊の森本右近太夫の墨書を探しました、これはポルポト時代に消されかけたとされていますが、さらに誰かが擦ってしまうのでしょうか、年々薄くなってほとんど見え



なくなってきました。

いったん外へ出て、第1回廊の浅浮き彫りマハーバーラタ、クルクシュートラの戦場の場面、カウラヴァ軍とバーンダヴァ軍の戦いの様子、戦士・騎馬・剣・弓矢、白兵戦の精緻なレリーフ、戦士たちの息吹が聞こえてくるようなレリーフでした。



帰路につきながら、西日を浴びたワットが水面に映っている池の前で集合写真！本日の夕食会場クメール宮廷料理、ホテル午後8時50分着 よく歩きよく登った一日でした。

2月12日(金)

モーニングコール午前4時30分、ホテル出発午前5時30分外は真っ暗。

朝日に浮かぶアンコールワットを求めて、暗い街の中を通り抜け、アンコールワットの参道のかなり手前でバスを降りましたが、大勢の観光客が手に手に懐中電灯を持ってアンコールワット敷地内の良い場所を求めて押し寄せていました。我々も池の手前の経堂のあたりに場所を決めそれぞれに日の出を待つこと30分やっ

と薄靄がピンク色に色づき塔の後ろから太陽が姿を現しました。

またその幻想的な景色が水面に映るシーンを求めて大勢が池の前に集中です。一段落したところで、昨日見残している第1回廊のレリーフ、天国と地獄（壁面を3段に分け、上段は王・良い兵士など、中段は閻魔大王が天国と地獄への振り



分け、下段が地獄と言った構成)、乳海攪拌（海というミキサー、軸受けに亀、軸を回す綱は大蛇、それを引き合う神々と阿修羅、粉々に粉碎される魚など……産物として出来るのが不老不死のアムリタです）これらのレリーフも実に緻密な表現で、写真やビデオ以上の迫力でした。見学の後ホテルへ戻り朝食です。

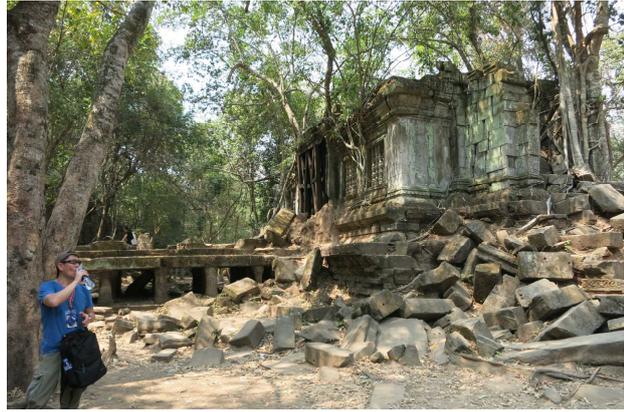
午前9時40分 北東40キロのベンメリアへ向け再出発。

午前9時40分 北東40キロのベンメリアへ向け再出発。

ガイドのピーナさんの説明ではべんは黄色、メリアは花、5～6月に咲く花の意

味で、元の名前が長すぎるのでこの名前となったそうです（未確認）。

さらに宮崎駿監督の「天空の城ラピュタ」のモデルになったとの説明もありましたが、遺跡の詳細が紹介されたのは映画公開よりも後で、私が6



年前に訪れたときは遺跡の周辺にまだ地雷のサインが残っていたことから考えるとこれもどうでしょうか？。

このベンメリア遺跡はアンコールワットよりも20年ほど前に建設が始まったようで、寺院の中心部は三重の回廊によって構成され東西180m南北150mとアンコールワットに比べても一回り小さいが配置や形状など極めて似通っています。

この見学の後、建築に使われた砂岩の採掘現場と称するところへ行きました、しかしここは小さな小川の跡としか見えず、規模と様子が一致していないように思えました。

### 地雷博物館

この博物館は元ポルポトの戦士として戦ったアキラさんが贖罪の気持ちから、被害に遭った子供達の救済の為に始めた地雷撤去事業をされたそうです。これに伴って出来上がった極めて小さな博物館です。数年前にはシュムリアップからアンコールワットへの裏道に作られていたものですが、街の発展に伴って北の方へ引っ越させられた博物館です。ポルポト時代に秩序無く埋設された地雷や砲弾などが展示されています。

この博物館の趣旨に賛同して、研修参加者の多くがここでドネーションをし、同時に戦争のむごさ・非情を学べたことと思います。

**バンテアイスレイ** 960年代に建てられたもので、堅さと彫刻に向いている赤色砂岩でヒンズー神話の緻密な彫刻が掘られています。1914年に発見され海外に大きな反響を呼び、アンドレマルローが彫像を盗み出そうとして拘留の憂き目に遭ったのもこの美しい彫像のあるバンテアイスレイです。



今回私達は、ユーラシア旅行社の骨折りで普段は 10m 以上離れた柵越しにしか見られない東洋のモナリザですが特別に柵の内側に入り近しく接することが出来ました。

この日の夕食はアプサラダンスを見ながらのビュッフェ、会場は 700 人も入っているので食事がゆっくり出来る雰囲気は全く有りませんでした。ダンスは子供の頃から鍛えた手の反らせた指・足の指、片足で体幹をしっかりと保ちゆっくりとした動き、なかなか力強いダンスでした。  
ホテルに戻ったのは 20 時 50 分



2月13日(土) 7時50分ホテル出発 いつものようにアンコールワット入り口近くのバスターミナルで小型バスに乗り換えアンコールトムの北に位置する**プリアカン**へこの地はチャンパ(ベトナム中部)との戦場跡地で戦勝記念と父ダラニンドラバルマン2世を弔うためにジャヤバルマン7世が建立、東西 800m 南北 700m、中心部は東西 200m 南北 175m、建築の特徴としては田の字型の内回廊と 9 基の塔、を持つ平面寺院で



す。中央祠堂の北東には丸柱の列柱の 2 階建石造建築、そして菩薩像、シバ神、ヴィシュヌ神、天女のレリーフなど多種の像が見られました。

**バンテアイクダイ**初日に訪れた**タプロム**寺院の南西に位置し貯水池スラスランに対峙した位置にありジャヤバルマン7世が 12 世紀末から 13 世紀にかけて建立した物のようです。建築様式は**タプロム**や**プリアカン**と同じ田の字型ですが材料の石材に時代の違う石材を転用したあとが発見されました。また数回にわたる増改築がなされていたようです。

**シアヌーク・イオン博物館**は出発前に上智大学の石澤先生からは是非寄って欲しいと推薦された博物館です。ポルポト時代に多くの仏像が破壊され土中に埋められ

たりしましたが、上智大の方々がバンテアイクデイでこれを発見し、ここにその仏像を整理して展示しています。

上智大学アジア人材養成研究センター、昼食後シュムリアップの街中にある研究センターを訪れ遺跡修復工事所長の三輪悟先生から遺跡の採掘の様子や経緯など1時間に渡る講義をして頂き、石材に関する質疑などにも応じて頂き研修旅行の目的の大きな成果となりました。

この後、カンボジアでの産物の一つであるシルクを見たいと言うことでシルク工場の見学も行いました。ここはシルクはもとより、木彫、石彫などの制作を行う工房のようなところで、シルクの産物の販売も行って、多くのメンバーがお土産にされたようです。

シュムリアップのオールドマーケット生活に必要な物全てがここで手に入ります。食品、衣料、宝石類、土産品、何でもそろいます。24年前よりはだいぶ綺麗になっていますが基本的には変わっていませんでした。ここをぐるりと見学してホテルへ戻り帰国に向けて一休み。

シュムリアップ ホーチミン経由で 成田帰国です

今回の研修で学んだこと、

支部のカンボジア研修は3回目でしたが、

1. 史実とは研究が進むにつれていろいろな見解が出てくること
2. 宗教:ヒンズー教、大乘仏教。小乗仏教
3. 組積造、ボルトと迫り出しアーチ、木造からの発想
4. 材料: ラテライト、砂岩 (グレー、赤色)
5. 近代カンボジアの歴史、ポルポト、ベトナム戦争、PKO、地雷、復興などなどでした。

写真提供 乗富さん、大谷、ユーラシア旅行社からの集合写真

参考資料 ユーラシア旅行社で用意して頂いた遺跡の地図と平面図

報告まとめ (株) 総合建築企画研究所 大谷徳義